

スポーツを保育現場に生かすための  
実践的教育プログラムの開発に向けて  
— IPU サッカー部所属学生のケースを中心に —

Research into the formation of a soccer curriculum in early childhood education  
Through the action research with students belonging to IPU's soccer club and  
nursery school children

次世代教育学部乳幼児教育学科

佐々木 宏子<sup>1</sup>

SASAKI, Hiroko

今泉 岳雄<sup>2</sup>

IMAIZUMI, Takeo

近藤 裕子<sup>3</sup>

KONDO, Yuko

志田 久美子<sup>4</sup>

SHIDA, Kumiko

松島 京<sup>5</sup>

MATSUSHIMA, Kyo

Dept. of Early Childhood Education 1.2.3.4

Faculty of Education for Future Generations

University of KinDAI Himeji 5

Faculty of Pedagogy

**キーワード**：サッカー，スポーツ保育学，幼児理解，保育内容

**Abstract** : This six-month research examined the influence of playing soccer on the mental and physical development of 5 year old nursery school children under the corporation of students from IPU's soccer club. Our objectives were to observe: 1) how soccer is a stimulative for young children as a content of early childhood education, 2) what kinds of effects children gain from a developmental point of view. 3) the possibility developing a new area of the early childhood education and care. Our conclusions suggest the following findings:

1) soccer is effective for improving children's health, motor skills and the formation of human relations ability, 2) the most important coaching method for young children is child-oriented[without strong teacher intervention] as children develop their ability in small group, 3) it provides numerous chances to understand each child's personality more deeply through such activities.

**Keywords** : Soccer, Soccer curriculum for young children, Child understanding, Sport area of early childhood education and care

I. はじめに —問題の所在—

IPU・環太平洋大学は「教育とスポーツ（体育）の融合」(以下、「融合」と略)を建学の精神としている。乳幼児教育学科においても、平成19年度新入生のうち体育会に所属している学生は3分の2を占めている。

保育（教育）とスポーツ（体育）の融合については様々な理論的なアプローチがあるが、いずれにせよ本学に所属する教員の重要な研究テーマの一つであろう。

基本的には大学生としての日常的な学習カリキュラムが存在する。特に、本学では数多くのスポーツ活動団体があり、それぞれに専属の監督やコーチが存在し

ている。学生達は夕方からの練習時間がほぼ毎日あり、時には早朝の練習も課される。さらに土日は各種の対外試合があり、学期ごとの休暇にも遠征の試合(海外も含む)や各種の合宿が待ちかまえている。

学生の学科所属がどのような専門分野であれ、学生の本分である学業というメジャー(主専攻)と、本学のような本格的なスポーツ活動を推進することが目的とされる場合はスポーツというもう一つのメジャーが重なり、多くの学生にとっては事実上はダブルメジャーということになる。

それだけでも学生生活は時間に追われることになるのだが、本学ではもう一つ、それぞれの学科がそれぞれの専門に応じて教員の免許や各種資格を取得することが強く促される。例えば、乳幼児教育学科では保育士資格、幼稚園教諭一種免許、小学校教諭一種免許が取得できる基本コースとともに、学生の希望によっては幼稚園一種免許もしくは保育士資格と中学校・高等学校一種免許(保健体育かもしくは英語でも可能)の免許が取得できるコースも存在する。

もし、これらの全ての可能性を何らかの選択で追求しようと望むならば、学生達は3つのメジャー(専攻)を背負い込むことになるだろう。一日24時間という絶対的な制限の中で、それはどのようにすれば可能なのだろうか? そのような意味では、「融合」問題は、二つ及び三つの専攻の両立(三立?)という物理的な問題から始めねばならない。

筆者らは、このような問題を追究するために「平成19年度環太平洋大学特別研究費」の支援を受けて、半年間の実践を経た後、結果を「保育とスポーツ(体育)の両立を支援するための実践的教育プログラムの開発—IPU学生のケースを中心に「融合」への提言—」(平成20年8月30日)という報告書にまとめた。

そこで得られた結論は、半年という実践期間の短さもあるが「融合」問題とは実に多様な要因が絡み合うため、いくつもの研究視点が発生することの難しさの再確認であった。大まかに分類しても以下のような視点が考えられる。

**A型(学業×スポーツ)：**両者が効果的に相互作用すれば両者に大きな成果が得られるが、逆にうまく行かないと「二兎を追う者は一兎をも得ず」で両者とも中途半端で終わってしまうことになる。

**B型(学業×スポーツ×免許・資格の取得)：**これは三兎を追うものでありさらに難しくなることは予想に難くない。

さらにB型の一要因である「免許・資格」を「アル

バイト」や「趣味」など、もっと他の要因に入れ替えることも可能であろう。しかし、前述のAとBの視点の背景にも、**学生の学業能力、スポーツ能力、体力、経済力(親の)、人格、コミュニケーション能力、人間関係の調整能力**などの要因が細かく絡んでくることになる。

「融合」には「正しい融合」、「典型的な融合」そして「望ましい融合」があらかじめ存在するわけではない。この「融合」問題で一番困難なことは、モデルが不足していることである。その困難さは、本学が開設したばかりで歴史がないということもあるが、高校までをスポーツに明け暮れていたごく普通の学生が両立や「三立」を目指すことは、どのような支援をすれば可能なのかという難しい課題なのである。

もちろん、オリンピックに出場するなど一級のアスリートとして大成をした特別な事例は他大学においてないわけではないが、その「融合」のモデルは普遍化・一般化できるわけではない。

いちばん悪しき事例はなんの科学的根拠もなく力で押しまくるやり方であろう。いわゆる闇夜に剣を振り回すような「ガンバリズム」である。この方法は、最初こそ若干の高揚感と効果を生み出すかも知れないが、やがて学生達は疲れ果ててしまう。なぜならば、そこには学生自らの目的意識や意欲が統合されるような人格的な核が形成されず、その結果、精神の輝きが見られなくなるからである。もちろん学生の中には、自分自身の力だけでその作業を行うだけの力量をもつ者も、わずかではあるが存在しないわけではない。

## Ⅱ. 本研究の目的

筆者らは半年間にわたって、本学サッカー部に所属する学生を地元保育園の協力を得て、子ども達にサッカー指導をする事例を実践的に追跡してきた。サッカーを通して獲得された技術・能力などが、①保育にどのように生かされるか、②子ども達にどのような保育効果を生み出すのか、③スポーツ(今回はサッカー)をベースにした保育の新しい領域の創出の可能性を探るものであった。

結果として分かったことだが、これらの実践は「スポーツ保育学」の可能性を強く示唆するものであった。これは「融合」問題を追及する中で生まれきた貴重な発見であった。つまり、**B型(学業×スポーツ×免許・資格の取得)**の亜種である**B'型：「学業×スポーツ×保育現場で幼児にスポーツを教える」という実践が**

もたらしたものであった。

この実践的経験は「融合」という視点から考えるならば、B型（学業×スポーツ×免許・資格の取得）の中の「免許・資格の取得」を準備するための実践と考えることもできるし、それとはまったく異なり、将来はサッカー子どもクラブの指導者を目指す方向へとつながるものとも考えることもできる。また、それ以外にも「子どもに何かを教える」という経験が、人間理解や子ども理解という社会人としての大きな教養へと結びつくこともあるだろう。

つまり、「教育（学業）とスポーツの融合」とは古くから言われている「文武両道」と流れを同じくするものであろうが、現代社会では教育内容の近代化（多様化）とスポーツの近代化（多様化）が質量ともに深化・増大する中で、まだまだ情緒的に語られることが多く、決して科学的な研究対象とはなっていないように思われる。

「教育（学業）とスポーツの融合」とは、相反する文と武を統合・融合するというような困難で堅苦しい時代の意味合いはとっくに消え去り、現代ではもっと柔軟で開かれたものとなっているはずである。

例えば、教育とスポーツの両立・融合であっても、かなりの違いがある。

1. 一流のアスリートやプロのプレーヤーになるのか、
2. 一生アマチュアとして楽しむことを目的とするのか、
3. 保育者・教師として教育活動の一環として子ども達に教えるのか、
4. 体育の教師としての道を歩むのか、
5. 民間のクラブの指導者となるのか、
6. 観客やサポーターとなり人生の楽しみとして位置づけるのか、
7. 健康な身体を保つためのスポーツとして位置づけるのか等々、社会の変化とともにもっと限りなく両立・融合への可能性の道はあるだろう。

本稿では、「保育とスポーツ（体育）の両立を支援するための実践的教育プログラムの開発 - IPU学生 のケースを中心に「融合」への提言-」(報告書／平成20年8月30日)を下敷きにしつつ本稿のテーマに沿って再構成をしたい。

### Ⅲ. 実践研究の方法

方法：行動観察法及び面接法

サッカー部学生を保育園現場に週一回連れて行き、子どもたちにサッカーを教えつつもに遊ぶ姿を観察し、その様子をビデオカメラやデジタルカメラで記録する。記録した映像を分析しつつ、学生自身の感想・担任保育者の意見を聴取する。

対象保育園と園児：大学に最も近いS保育園5歳児9名（女児6名／男児3名）。保育園の簡単な概要は以下の通りである。

所在地：岡山県岡山市瀬戸町

開園年：平成13年4月1日（旧瀬戸町より委託を受ける）

敷地：2,376.00平方メートル

建物：483.68平方メートル

定員：45名

保育対象年齢：生後1.5ヶ月～就学前まで

保育時間：午前7時～午後7時（午前7時30分以前、午後6時以降は延長保育）

休園日：日曜日・祝日・国民の休日・年末年始

職員数：13名（園長を含む）

期間：平成19年11月22日（木）～平成20年3月5日（木）。木曜日週1回で全9回（学生の休暇や園の行事を除く）。1回の練習時間は、平均40分～50分（午前9時20分頃から10時10分頃まで）。

場所：S保育園園庭（1, 919.97㎡）。雨天の場合は屋内。

参加学生のサッカー歴：サッカー部に所属する1年男子W学生（体育学科）＝専門学校（2年）修了・小学生サッカー指導歴2年半。K学生（学級経営学科）＝幼稚園児代よりサッカー歴ありで現サッカー部部長の2名が中心で、他に時々U学生（体育学科）が参画する。計3名

担任保育士への聞き取り調査：平成20年6月25日（水）16：00～17：00。（園にて）

W学生とK学生のレポート：平成20年7月30日提出

事前・事後の比較実践研究：事前研究は、特別研究費が決定される前の平成19年7月5、12、19日の3回。乳幼児教育学科学生3名。内訳は、サッカー2名男子・ソフトボール1名女子。

事後研究は、①平成20年5月22日～7月17日の間に8回。サッカー部20年度新入生4名男子。内訳は、乳幼児教育学科3名・体育学科1名及び②平成20年11月より再びW学生とK学生の協力を得て、月2回の割合で実践を再開している。

## Ⅳ. 結 果

以下の表は、毎回ビデオ記録に撮ったもののデータであり屋内で行った。  
をまとめたものである。紙面の都合で、2回分のみ分  
析例を紹介する。今回は全9回のうち1回のみが雨天

### 映像の分析例 1（平成19年12月5日／第2回目）

(9:20～10:10) 学生3名／園児9名 晴れ

時間	学生の指導	園児の反応
9:20	・鬼ごっこでウォーミングアップ (寒いので、いきなりボールを使って怪我をさせてはいけないと思 い、鬼ごっこをして楽しみながら走って体を温めようと考えた。学生談)	・キヤーキヤー言いながら逃げ回る。
9:25	・新しいサッカーボールの包みを開く ・ボールの蹴り方を教える。(最初に手での当てをさせ感覚を掴 ませてから足けりへと移す。学生談)	初めて新しいボール(大学で子ども用サッカーボールを購入)を 手にして喜んでた。 ・ボールを手で投げることはできたが、足を使って蹴るのはうま くコントロールができなかったが、真剣に集中していた。
9:30	・ピンを6本(ペットボトルに水を入れて)立て、手でボール を投げて倒す。→ 足で蹴ってピンを倒す。しかし、上手くでき ない。 ・学生が子どもにボールを手で転がしてやり、それを子どもがゴ ールへと蹴る。 ・2チームに分けて競わせる。(帽子を裏返してチームを色分け する)	(ボールは、本格的な子ども用サッカーボールをこちらで購入貸 与) ・一人2球ずつ  ・三角型トラップ&シュート
10:03	・ゴールにボールを蹴って入れる。(2チームに分かれて)入っ たボールの数を数える。 ・ボールは全力で投げさせ、達成感を味わわせ、そのボールを子 どもたちに返す時は、ボールを蹴りやすいように配慮して投げて いた。(簡単なことからさせて、慣れてきたら応用の練習をした。 学生談)	・子ども用のゴール(園側で購入)が来て、ゴールする回数が増 えて嬉しそうだった。  ・学生の援助を受けながら、ボールを蹴ることができて、喜んで いた。子どもは、満足した表情
10:10	・最後の整理と話し合い・挨拶(子ども達は同じ園でよくまとま っている。学生談)	・最後に学生が今日は「面白かったか」と聞いたところ、負けた チームの子一人が手を挙げず、学生は困惑の表情。途中で「いざ こざ」があった女児同士には握手をさせていた。

### 記録映像の分析例 2（平成19年12月19日／第4回目）

(9:40～10:10) 学生2名(W・K)／園児8名(男児1名欠席) 晴れ

時間	学生の指導	園児の反応
9:40	・ボール鬼でウォーミングアップのちコオリオニヘ ・1,2と順に番号を呼称させた後1と2のグループに分 ける。第2チームの帽子を裏返させグループが明瞭にな るよう工夫する。2チーム(レッドチーム・サッカーチ ーム)。	・興奮して奇声(ワオー・ワー)を発しながら、駆け回る。 要領よくグループに別れる。
9:45	・グループ対抗シュート(1分間でボールを何個シュ ートできるか競い合う。)ボールは各自1個ずつ。 ・子どもにジャンケンをさせて、順番を決めさせた。サ ッカーチームの勝ち	・学生が何も言わないのに、各チームで「エイエイオー」 と掛け声をかけ、士気を高めていた。 レッド5対サッカー8



	<p>・2人ペアでボールを背中にはさんで往復する。転ぶ子どもがいて、学生が「ワッショイ・ワッショイ」と声をかけてあげる。</p> <p>・背中に挟むのは、難しいので、ボールをお腹にはさんで往復する。</p> <p>・2チーム対抗リレーをする。</p> <p>・お腹にボールをはさんで往復 「レッドチームの勝ち、これで1対1」</p>	<p>・勝ったチームは、飛び上がって喜ぶ。</p> <p>円陣になってみんなで手を差し出して、「エイエイオー」と2回繰り返す。</p> <p>負けたチームは、顔をうなだれ、しゅんとしている。</p>
10:00	<p>・ドリブルリレー</p> <p>手を使った子どもに「手を使わないようにしよう」と学生は言う。タッチをしてから次の人にバトンタッチするように指示。勝負はひき分け。</p>	<p>← 佐々木がお腹に挟む方がやさしいことを示唆する。</p> <p>・レッドチームは「ヤッター」と飛び上がって喜ぶ。</p> <p>・子どもたちは、ボールを上手に蹴りながらコーナーを回っていた。</p> <p>・引き分けと聞くとレッドチームとサッカーチームの子どもがハイタッチをしてお互いに喜んでた。</p>
10:10	<p>・今年最後の練習なのでKが子ども達に飴を1個ずつ保育士に断ってからプレゼントする。</p>	<p>・子ども達は、今回初めて自主的に後片付けをした。</p>

## V. 考 察

### 園児の特性

地域のサッカークラブの子どもたちと異なり、保育園で数年生活を共にし、情緒的一体感のある集団であるためか、サッカーのためだけで集まるクラブ集団より勝負をめぐるケンカが少ないと指導経験のあるW学生は感想を漏らしていた。

サッカークラブのように保護者が指導場面を参観することはなく、担任保育士も園児を激励・評価せず傍観的態度で接し、学生の主体的行動に委ねられた中でサッカー指導や関わりなので、園児の間にサッカーに関する周囲からの期待や評価のプレッシャーの少ない状況で行われた。担任保育者は、「聞き取り」で、この時間は全く「お任せする」という姿勢で関わったと述べている。S保育園の地域性（3世代家族が多く利用者也限られ少人数でのんびりしている）から、5歳児クラスの人数も9人とまとまりやすく、女子に体力・社会性の高い子が多く認められたが、子ども同士の力による支配関係が見られず葛藤の少ない融和的集団であった。

ストレンジャーに好奇心を持ち受容的で、教わったことを楽しみながら習得しようとする動機付けの高い

集団（5歳児という年齢の持つ特性でもある）であった。担任は、「サッカーのある日は楽しみで楽しみで、お兄ちゃんの名前を覚えたり、近所に大学ができてお兄ちゃんが来てくれることが嬉しいようだった。ときにはサッカーよりもお兄ちゃんが嬉しいという感じであった」と述べていた。また、登園の朝は「きょうは早く行かねば」と保護者に話していたと言う。男児1名はサッカー選手になる夢を持ち指導学生の1人にあこがれるようになり卒園式では園生活の一番の思い出として、舞台の上で保護者にサッカーボール蹴りを披露した。私たち式に参加した教員も、子どもたちに「楽しい時間」を提供できたことの確信がもてて感激した。

### 1) スポーツ保育学構築への視点1：どのような集団が望ましいか

通常、就学前の子ども達がサッカーを定期的に行う場合、よく遊び慣れた幼稚園や保育園の仲間達と行うことはそれほど多いとは思えない。園庭の広さや指導者の問題、さらには指導計画としてサッカーをどのように位置づけるのかはまだ確立した保育内容とはなっていないからであろう。それゆえ、どうしても、地域の民間のスポーツ団体や愛好家の組織に参加することが多く、そこに集う子ども達は普段の遊び仲間ではないことが多い。もちろん、このような異質の仲間集団・組織にも新たな役割はあろうかと思うが、日常生

活での気心の通じ方や仲間意識の成熟という観点からは、圧倒的に日常的に通う保育園・幼稚園の仲間の方が優れている。就学前の子ども達がサッカーを楽しむとき、どのような仲間集団でどのような指導者の下に行うかは最も重要な課題となろう。

ドイツサッカー協会編の『21世紀のサッカー選手育成法』<sup>(1)</sup>では、「若年層育成のための基本となる要素」の中の「クラブでのサッカーを楽しめるものに」の中で次のように述べている。(P.5)

▲子どもたちには押しつけのないサッカーがしたいと思っている。

- ・全て自分のために、自分のルールに従って
- ・コーチの大きな影響なしに
- ・親からの干渉なしに
- ・自分の望むままに
- ・自分の能力に応じて
- ・小さなグループで

このように行うことによってサッカーが大きな楽しみとなり、生涯を通じてサッカーを好きであり続ける基盤ができて上がる。こうしてこそ、サッカーは子どものための経験となる。

▲子どものゲームを大人のゲームにしてはならない。

▲大人による細かすぎる指示や条件付けの押しつけ、強制は、子どものサッカーでは求めるべきではない。

▲コーチは自分の子どもの頃を振り返ってみよう心がけなくてはならない。コーチは、熱意をもって、手助けの心をもって、何よりも子どもたちが自分自身で行うサッカーを奨励し、オーガナイズする。コーチはそれで、主要な役割をほぼ果たし終えたことになる。

素晴らしいサッカー保育学である。わが国の「幼稚園教育要領」(平成20年)は新しく改訂されたが、旧版から引き続き、幼児の「自発的な活動としての遊び」や教師に「幼児の主体的な活動が確保される」ことを強く指示している。両者は、幼児への保育観としてはまったく共通しており矛盾のないものである。

### 学生の指導について

初回(平成19年11月22日)は子どもたちにボールを順番に蹴らせ、その後シュートする場所を設定しすぐに2チームに分かれ試合をさせたが、なかなかゴールに入らず、園庭遊具のドラえものの口にシュートさせるなどの工夫を学生が行うが、難しくうまくいかなかった。この経験を生かし、次回から学生は鬼ごっこでウォーミングアップをしたり、ペットボトルをボー

リングのピンに見立て、サッカーボールを蹴らせたり、マークを複数置いてその間を縫うようにボールを蹴って移動させるなど、ボール操作のスキルを向上させるためのわかりやすく興味の持てるメニューを準備してくるようになった。

学生の話では、前回と次の回がつながるようにメニューを考えるとともに、園児にもそれが確認できる言葉がけをするよう心がけたと言う。園児たちの間にも毎週訪れてサッカーを教えてくれるお兄さんたちというイメージが浸透し、次回を楽しみに待つようになり、学生と園児の交流にも連続性・発展性が認められるようになった。

サッカーを媒体にそのときそのときの活動目標が明確になり、個々の園児の課題に向けた行動は学生によって評価され、励まされ、より達成しやすいように助言が与えられ毎回の練習課題設定が変えられた。そのような園児と学生のやりとりの中で、子どもと学生の情緒的な交流も深化し、園児は学生をニックネームで呼んで安心して自分を表現できるようになった。

サッカーというスポーツを園児と関わる媒体として使用し、ボール操作のスキルアップの目標を目に見える形でシンプルにわかりやすく示し、学生が園児と過ごす時間を魅力的に構造化(カリキュラムとして組み上げた)しえたことが、学生の保育活動の連続性・発展性、園児との情緒的交流の深化をもたらし、スポーツを長年練習してきた学生による「スポーツ保育学」の初歩的な1つの形が提示されたと思われる。

その成功の背景として、サッカー部員間の人間関係も深まった11月にスタートしたこと。チームを統括する部長のK学生と小学生指導の体験を持つW学生が参加し、事前に次回の指導の準備が行われたことがあげられる。また、幼児のサッカー指導に関しては楽しむことを中心にして結果、順位を記録しない、勝ち負けにこだわらないなど、幼児教育をベースとした「指導哲学」を持ち、そのマニュアルが日本サッカー協会で作成されていることや、Kの園児を愉快地にリラックスさせるトリックスターのキャラクターや小学生指導の経験を持つWの穏やかでゆったりとしたキャラクターも園児の継続的かつ積極的なサッカーというスポーツへの参加意欲に貢献したと思われる。

ただ学生が5歳児の発達に精通していないため、「5秒以内ね」とか「2回の点数を足してみよう」などと園児の理解を超えた声かけも少なからずあった。また、2チームに分かれての勝負に負けたり、ボール操

作がうまくできなかつたり、ウォーミングアップの鬼ごっこで鬼にされてすねた園児に気づかないなど、スポーツ指導に重点が置かれ、個々の園児の個性や情緒的な反応に対する目配りが足りなかった点も観察された。しかし、このことは今までに乳幼児との接触がないわけだから当然のことであろう。

## 2) スポーツ保育学構築への視点2：指導者にはどのような資質が望まれるか

私たちは、今回の実践研究のために監督やコーチからも随分と協力を得た。その過程で日本サッカー協会が刊行した6歳以下の子どもを対象とした「キッズ(U-6)指導ガイドライン」(技術委員会キッズプロジェクト)<sup>(2)</sup>を紹介してもらったが、このガイドラインは「スポーツ保育学」についてのガイドラインでもあった。「イントロダクション」では、「こどもは小さな大人ではありません。…6歳以下のこどもに合ったサッカーがあるのです」(P.7) もそうだが、「ゲームのガイドライン」では「結果を記録しない、順位を記録しない」を約束事としましょうと、書いてあり、私たちはその「保育観」に衝撃を受けた。(P.26)

つまり、6歳までにスポーツをすることの最も大切な意味は、将来、スポーツのもつ強烈なゲーム性の魅力(魔力)の一つである「勝ち・負け」の感覚が鮮明にわき起こる前に、十分にサッカー(スポーツ)そのものを楽しめる感性を心身にしみ込ませることであろう。

もし、子どもたちがサッカーの楽しさ・面白さやスポーツを通して獲得できる友達との人間関係の奥深い複雑さや充実感を実感する前に「勝ち負けの世界」に囚われてしまうならば、そのスポーツ経験は技術のモザイクのまま終息を迎えるだろう。

また、このガイドラインは、U-6年代のコミュニケーション・スキルのトレーニングにおいて重要なものとし、以下のことをあげている。(P.38)

- 1 こどもの自由な発想を受容し、認めて褒める。
- 2 論理が破綻していても否定せず、こどもが自分の考えの根拠を述べたことを褒める。
- 3 「どうして」「なぜ」を軸にこどもとコミュニケーションをする。
- 4 こども扱いせず、こどもの理解できる言葉で練習の意味や目的を説明し、こどもに考えさせる。
- 5 生活のあらゆる場面でコミュニケーション・スキルを応用する。

この原則は、乳幼児教育の原理そのものであり、サッカーというよりは保育そのものであることに改めて驚

きを禁じ得ない。

## サッカーが幼児期のスポーツに適している理由

幼児期に親しまれるスポーツは、伝統的な日本の武道をはじめ、数多くの種類のものがわが国でも民間の教育組織(クラブ)で行われている。そのような多様なスポーツの中でもサッカーはかなり幼児期にふさわしいものの一つと考えられる。理由としては、①ゴール1つを目指すことで集団が容易に凝集できる。②相手のゴールに蹴ってボールを入れるというルールが理解できる3歳以上なら十分ゲームを楽しめる(ゴールキーパーと相手方ゴールに向かってボールを蹴る2つの役割が理解できればゲーム成立)。③何人でもその子のレベルに応じて参加可能であり、スキルアップするにつれ、仲間との連携や役割、全体の中で自分がどう動くかという全体の中の自分の位置づけの認識や判断力が養われる。

決められた時間内に目的に向かって動く持続性や集中力や体力、ボールを操作する運動能力などは、幼児期の子ども達にすでに培われており、無理なく楽しめるものである。

## 3) スポーツ保育学構築への視点3：幼児期にふさわしい集団スポーツの特性

サッカーは人数も柔軟で「ゴールを狙い、ゴールを防ぐ」(1, P.3)だけでルールも単純、幼児にも充分理解することがでる。トレーニングのポイントも以下のようにまとめられている。(2, P.21)

☆おにごっこなどで判断能力を養う。

☆多様な動きでバランス感覚を養う。「歩く」「走る」「投げる」「跳ぶ」「ぶら下がる」「つかまる」などの基本要素

☆からだ全体を使っていろいろな形でボールに関わる。

☆こどもたちが楽しくからだをうごかせるようにする。

ゲーム性に優れ、幼児の好奇心や競争心を適度に刺激する中で、人間関係や身体の動きの敏捷性なども育んでくれる。また、就学前までは男女差はほとんどなく男女混合でも行うことができる。

## 指導学生達の学んだこと

私たち教員が印象的だったことは、担任教師も述べていたが子ども達のお兄さんへの愛着であった。サッカーの練習中は、ルールに従う行動をしていたが、終了の挨拶と共にワッとお兄さんを我先にと取り囲み、



抱っこやグルグル回りをしてほしがると、子ども達もその要求に応じる学生もまったく違和感なく遊びが続いたことである。このことは、今回、サッカー（スポーツ）という限定されたルールある活動を保育の場に割り込ませたのだが、学生達が子ども達に受け入れられ楽しめたからこそ、そこに新しい親和性のある人間関係が育まれていたという証拠であろう。もし、これが民間のサッカー教室のように「職業としての指導者」の顔をもつ人が、職業として子ども達と向き合うだけならば、練習終了後にこのような子ども達の遊びへの要求に、こんなにもすんなりと連続感覚で応じてくれたらどうか。また、子ども達もこんなにも素直に自分の心身を預ける行為をするだろうか、という思いが残った。

指導してくれた学生達のコメントは、すでにいくつかはとり上げたがもう少し紹介してみたい。以下の抜粋は、学生に許可を得て掲載するものである。（アンダーラインは筆者ら）

#### K学生の感想：

ここで感じたことは、子ども達の目がとてもいきいきしていて何事に対しても全力でやってくれることです。ほかの練習でもそうでしたがとても一生懸命やります。このことは、とても園児達から学ばされました。それと感じたことは、私も鬼ごっこにまざったのですが、園児達はよく私を鬼にさせたりします。ほかの園児を鬼にしても、またすぐ私を狙ってきます。もっと私にかまってほしいのかなと感じました。鬼ごっこを終わらせた後にボール遊びをやりました。最初に基礎的な簡単なことからさせ、慣れてきたら、最後に応用の練習をしました。ここで感じたことは、足でボールを扱うのは初めてだったらしく、子ども達は慣れていませんでした。ボールを手で扱うことは、慣れていたものの、足を使うとうまくコントロールできていなかった。しかし時間がたつにつれ、すぐに上達しました。（そして、まとめとして）

1. サッカーは小さい頃からボールに触れていた方が良くといわれていますが、この年代は短い期間ですぐ上達するんだと感じました。
2. 私が園児に指導する時に意識したことは、いつも笑顔で接することです。意外と園児は人の顔を見てその人の機嫌を察知するのに敏感ですから、毎日の練習を園児に楽しくさせたいと思っていつも笑顔で園児に接していました。このことは当たり前かもしれませんが、とても大事な

ことだと思います。朝、嫌なことがあって落ち込んでいる園児も、私達指導者が元気で笑顔で接していれば園児も元気がでてるかもしれません。

3. 今終わってみて感じることは、一つ目は前述したとおり、園児はとても元気で何事にも一生懸命にチャレンジしていきます。このことはどんどん伸ばしていきたいし、この先でもとても大事なことです。
4. 二つ目に園児はとても負けず嫌い、特に男の子、最後にサッカーのミニゲームをさせたのですが、負けたら泣く男の子もいるのです。そういう悔しいという気持ちは大事だと思います。僕も試合に負けたらよく泣いていましたし、負けて泣く男の子は一つのことに対して強い気持ちをもっていると思います。
5. 園児を指導して教えるより逆に教えられた事の方が多かったです。また機会があれば是非指導を試みたいです。

#### W学生の感想：

私は今回のサッカー指導を通じて、たくさんのことを学ぶことができました。以前にも、小学生を対象にサッカー指導をしたことがあり、今回の指導の総評としては満足のいくこともあり、改善すべきこともありました。

満足のいく点としては、園児が楽しくサッカーができたこと、園児同士の協力し合う場面がたくさん見られたこと、園児のサッカー及びボール遊びの上達が見られたこと、指導時間が適切であったこと、コーチ同士の協力でたくさんの練習メニューが展開できたこと、園児たちと良好なコミュニケーションをとることができたことなどが挙げられます。

改善すべき点としては、練習のテーマに一貫性が無かったこと、ゲーム（試合）の際にみんながボールに触れるような工夫ができなかったこと、練習の説明や意図が園児にうまく伝わらないことがあったことなどが挙げられます。

以上の点は次回、指導する機会があった際には改善し、さらに良い指導ができるように工夫していくべき点だと思います。そして今回のサッカー指導を、以前、小学生を指導していたときに比べ、園児同士の仲が非常に良かったこと、サッカーやボール遊びに対して非常に積極的に取り組んでくれたこと、コーチに対して積極的にコミュニケーションをとってくれたこと、な



ど良い点がたくさんありました。

私が以前教えていたサッカー教室では、練習中やそれ以外の時の喧嘩や、練習やゲーム（試合）に対して非常に消極的な子供がいたりしたので、非常に苦勞をしました。しかし、今回の指導ではこの点に関しては問題なく指導に取り組めたと思います。

この指導を通じて私自身も非常に楽しくサッカーができ、とても勉強にもなり、有意義な時間とすることができました。次回サッカーの指導をする機会があれば今回の経験を活かし、よりよい指導ができるよう努めていきたいと思います。

#### 4) スポーツ保育学構築への視点4：スポーツを通して幼児理解が深まる

たった二人の学生の感想であるが、実に鮮明に指導者としての資質の違いが現れているように思う。Wは、すでにキャリアをもつ指導者らしくあくまでも「サッカー指導」という原点からの反省や考察が冷静に語られている。彼の場合は、サッカーを自覚的に行い始める10代の子どもたちの良き指導者となるだろう。

それとは逆に、Kは乳幼児教育の学生ではないにもかかわらず実に幼児の心や発達への関心とセンスをもっていることである。それが、天性のものか育った環境からのものか、またその二つが合わさったものかは分からないが、おそらくは「二つが合わさったもの」が真実に近いように思われる。私たちの分析では、乳幼児教育を一年間学んだとしても、もし実践が伴わなければとてもこのような高度な幼児理解は望めないだろうと考える。

Kの場合は、たった9回の実践で驚くほど巧みな「スポーツ保育学」の可能性を創出している。「私を鬼にさせたがる」理由も、彼なりに分析しているが子ども達はそれがスポーツであろうがなかろうが「あなたと遊びたい」と表現しているのだ。このことは、乳幼児期の保育者にとって（と言うよりすべての教育者にとってと言ってもよいかもしれない）最も大切な資質は何かと言うことを強く示唆している。

「チャレンジすることは伸ばしたい」、「泣くことは強い気持ちの現れ」も素晴らしい考察である。

## VI. スポーツ保育学の構築への提言

今回の実践を通して得られた大きな教訓は、6歳までの子ども達に関わることは、それがどのようなスポーツに関わる領域であれ、すべては広い意味の保

育・教育の一環なのだという事実の発見であった。

幸い、西洋のスポーツであるサッカーには自立した人格像の確立を背景にした、「サッカー保育指針・教育要領」が、ごく初歩的なものとはいえずに確立していることが分かった。（「キッズ（U-6）指導ガイドライン」（財団法人日本サッカー協会／技術委員会キッズプロジェクト）。今回のささやかな実践によって得られた結論は、

### 1) スポーツ保育学構築への視点1：どのような集団が望ましいか

就学前の子ども達がサッカーを楽しむというとき、どのような仲間集団でどのような指導者の下に行くかは最も重要な課題となろう。現在、保育園も幼稚園も長時間保育の流れが強まっている。長時間保育が子どもにもたらす影響については、決して望ましいものばかりではない。幼稚園における預かり保育や保育園における延長保育の時間などを有効に利用するなど、集団保育の場においてもっとスポーツを子ども達の身体・運動機能の発達や人間関係調整能力形成のツールとして活用することはできないものか。集まって大人の指導のもとで取り組むのは「週1～2回、1回45分くらいまでにしましょう」と、「キッズ（U-6）指導ガイドライン」は述べている。（P.20）

### 2) スポーツ保育学構築への視点2：指導者にはどのような資質が望まれるか

現行の「保育所保育指針」や「幼稚園教育要領」が望む保育者の資質とサッカー協会が要求する指導者の資質は、驚くほど同じである。例えば、「キッズ（U-6）指導ガイドライン」は、次のように述べている。（P.32）

- 自分自身でいろいろなことをやらせましょう。
- 答えを先に出して、これはダメ！ではなく、失敗したときに何が良くなかったかを見つけ、修正していきましょう。（略）
- こどもは失敗しても良いのです。大いに失敗をさせてあげましょう。失敗をさせないようにしたら学ばません。（略）
- わかりやすい言葉で穏やかにはなすよう心がけましょう。
- じょうずにできた時には、必ず褒めてあげましょう。以下略。

まさに「保育ガイドライン」である。

### 3) スポーツ保育学構築への視点3：幼児期にふさわしい集団スポーツの特性

少人数で男女混合も可能であり、それほど園庭が広くなくても行える。子ども用のボールやゴールも規格品としてあり、前述したようにルールも誠に単純である。

#### 4) スポーツ保育学構築への視点4：スポーツを通して幼児理解が深まる

これは、指導者の資質ときわめて密接に関連するものである。伝統的な保育内容とは異なる視点からの子ども発見と子ども理解が促進される可能性を秘めている。

### VII. 今後の課題

今回は、事前事後の実践研究と担任保育士への聞き書きの分析・考察も残されたままになっている。また、映像の分析もほとんど手が付けられないままになっているが、これは、具体的な指導の実態を示すものであり、いずれプロのサッカーコーチの助言の下に行う予定である。また、集団保育の場で行われるサッカーの具体的なガイドラインの作成も必要になろう。

### 引用文献

- (1) ドイツサッカー協会編 ゲロ・ビザンツ他著  
田嶋幸三監訳 今井純子訳 (1996) 『21世紀のサッカー選手育成法』 大修館書店
- (2) 技術委員会キッズプロジェクト 発行年不詳「キッズ(U-6)指導ガイドライン」財団法人日本サッカー協会

### 謝 辞

最後にお世話になったS保育園の皆様、サッカー部の学生・監督・コーチの皆様、何よりもこの研究に「平成19年度環太平洋大学特別研究費」の予算をご配慮いただいた学長ならびに関係者に感謝します。

(平成20年11月27日受理)